

知的障害者の思考力・判断力・表現力を形成する「教科別の指導」の指導方法について（Ⅱ）

—社会の実践での達成率の経年変化を通して—

○吉澤 洋人 (東京都立あきる野学園) 川西 邦子 (東京都立府中けやきの森学園) 今枝 史雄 (大阪教育大学) 菅野 敦 (東京学芸大学)

KEY WORDS: 知的障害 思考力・判断力・表現力 社会

I. 問題の所在と目的

2017 年及び 2019 年に特別支援学校学習指導要領が告示された。知的障害のある児童生徒への教科別の指導では 3 つの資質・能力に合わせて目標が設定されたが、2009 年に告示された学習指導要領では、社会科は「思考力・判断力・表現力等」に関する目標が設定されていない。併せて、今枝ら(2021)によれば、社会科は中学部及び高等部で殆ど取り組まれていないことが明らかとなっている。よって、今後、社会科における思考力・判断力・表現力等の形成に関わる指導方法を検討していく必要があると言える。

以上の課題を踏まえ、成人期知的障害者の生涯学習支援の取組であるオープンカレッジ東京では社会科地理分野に関わる課題として、身近な食材の比較を行う「ディスカバー講座」を開講してきた。講座では食材に関わる資料の読み取り、表への整理という活動を一貫して取組んできた。

本研究では、「ディスカバー講座」の 2016 年度から 2019 年度までの講座における思考力・判断力・表現力等に関わる活動の達成率の経年変化を明らかにする。そして、知的障害者の思考力・判断力・表現力等の形成に向けた指導方法を明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 対象講座: 2016 年度から 2019 年度にオープンカレッジ東京で実施した「ディスカバー講座」の講義であった。テーマは一貫して、世界の食材の比較であった。年度別のテーマ、題材、比較の観点を表 1 に表す。

表 1 ディスカバー講座 年度別 テーマ・題材・比較の観点

| 年度 | テーマ | 題材 | 比較の観点 |
|------|-----|--------------------------|-------------|
| 2016 | お茶 | 「緑茶」「ウーロン茶」「紅茶」 | 色、形、発酵 |
| 2017 | 主食 | 「クスクス」「トルティーヤ」「ウガリ」 | 色、形、原材料 |
| 2018 | パン | 「ライ麦パン」「フランスパン」「トルティーヤ」 | 色、形、固さ |
| 2019 | コメ | 「ジャポニカ米」「インディカ米」「ジャバニカ米」 | 色、形、炊いた時の様子 |

2. 講座展開: 講座展開は全て共通で、「講義」「食材の特定」であった。**1) 講義:** 題材となる食材の生産地他、題材の特徴と地理的要素を学んだ。**2) 食材の特定:** 講義で学んだことを説明できるようになることを目標として示し、4 プロセスを設定した。**①要素の抽出:** 講義内容をまとめた資料から、それぞれの題材(例: 緑茶)の特徴を表す言葉(要素)を文章から抜き出し、付箋に書いてシートに貼る活動を行った。要請に応じて観点を記したヒントカードを配布し、必要に応じて個別に支援した。**②要素の整理:** ①で抽出した要素を、共通点を意識してマトリックス表に並べた。**③観点の命名:** 整理した要素ごとに名前(観点)を考えた。要請に応じて、観点の書かれたヒントカードを配布した。**④対象物の特定(定義づけ):** 年度ごとで活動に差異があるものの、対象物 1 種について観点ごとにその特徴を述べた。**3. 対象者:** 成人期知的障害者で、2016 年度は 42 名、2017 年度は 32 名、2018 年度は 34 名、2019 年度は 40 名であった。**4. 手続**

き: 各年度、一貫して活動を変更せず、遂行状況の確認した「要素の抽出」「観点の命名」の達成率を算出した。達成水準は①自ら遂行した「達成」、②ヒントを提示した「ヒント提示」、③ヒント提示に支援者の声掛けが必要だった「ヒント提示+支援」、④答えを提示した「未達成」の 4 水準とした。

III. 結果

年度別の「要素の抽出」「観点の命名」の達成率を図 1、図 2 に示す。

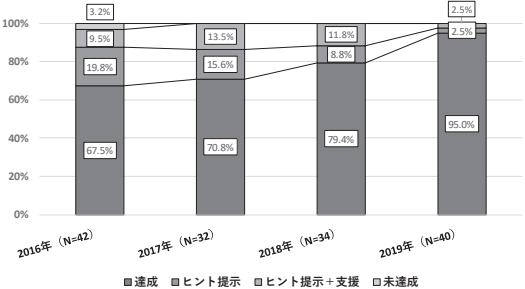


図 1 「要素の抽出」 年度別 達成率

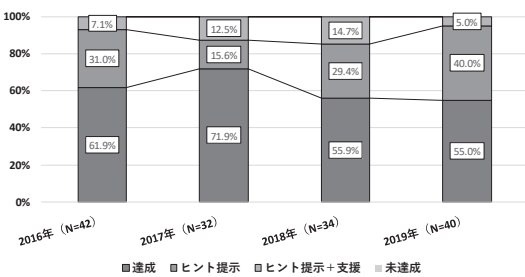


図 2 「観点の命名」 年度別 達成率

「要素の抽出」は、「ヒント提示」を必要とする対象者が年々減少し、「達成」が増加していた。「観点の命名」は、2018 年以降「達成」の割合が減少し、「ヒント提示」を必要とする対象者が増加したが、「未達成」は見られなかった。

IV. 考察

「要素の抽出」は「ヒントカード」を準備することで対象者が自ら学習に参加しつつ、同プロセスを理解することができたと考える。この事は上記の図 1 の結果以外にも「ヒント提示」の割合が同年度(3 試行)内でも 2 回目以降(例: 1 回目「クスクス」、2 回目「トルティーヤ」)に減少したことからもわかる。「観点の命名」は 2018 年以降の達成度の減少は、観点名の抽象度の高さ(例: コメの「炊いた時の様子」)が原因と考える。しかし、「ヒントカード」を用いて命名できている対象者も多く、ここでも段階的支援の有効性が見られた。今後の課題として、抽象度の高い観点については対象物の違いや特徴を説明(表現)する手だてを含む提示方法を検討することが必要である。

【附記】 本研究における課題は、対象者に対し、参加・協力の同意および学会発表の承諾を得た上で実施した。課題に協力してくださった方々に深謝申し上げる。
(YOSHIZAWA Hiroto, KAWANISHI Kuniko, IMAEDA Fumio, KANNO Atsushi)